



R5.02.18撮影

【巻頭言】

「0」と「1」の間を埋めるもの

二本松市立新殿小学校長 紺野 真一

2022年は学制発布150年目にあたる年でした。来年度、創立150周年を迎える学校も多いことと思いますが、驚くべきは、明治5年(1872年)の学制発布のわずか3年後の明治8年までに、全国に24、303校の小学校が開設されたということです。令和4年度の学校基本調査によれば、全国の小学校数は19、161校で、現在の小学校の原型は150年前にすでにあったと考えられるでしょう。ほとんどが寺や民家を借りての開設でしたが、年号が「明治」に変わって10年を待たずに公教育がスタートしているということは、文部省、府県の勸奨があったにせよ、当時の人たちが、「新時代で身を立てるためには教育が何よりも大切だ。」と考えていたということが分かります。

学制発布と同じ明治5年には、あの「學問ノススメ」初編が出版されました。「天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ 人ノ下ニ人ヲ造ラズ ト云ヘリ」福沢諭吉は人は生まれながらにして平等であると述べたわけですが、彼は続けて、「しかし実際は、賢い人・愚かな人、貧しい人・裕福な人といった雲と泥のごとき大きな差が生じている」と語ります。そしてその差が生じる原因は、「学問(実学)の有無にある」と断言しています。彼は150年前に「知識基盤型社会」について語っていたのです。

さて、それから学校は、明治・大正・昭和と常に新しい知識や技能、情報を伝え発信し、地域の期待と信頼を担ってきました。しかし、平成・令和と時代が移り、「Society 5.0」を標榜する現在、学校は必ずしも最先端を走っているとは言いがたい状況です。社会の変化に、学校は何とか追いつこうともがき苦しんでいるようです。もう、学校の役割には終わりが近づいているのでしょうか。

いや、仮想空間と現実空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立するのが「Society 5.0」ならば、子どもたちに、現実空間で体験を共有する経験を積ませていくことが、学校が担うべき、学校でしかできない役割ではないかと私は思います。

仮想空間は、主に視覚と聴覚の情報により人がイメージするものです。イメージを共有するには、そのベースになる共通の体験や経験が必要です。ゆえに、学校では、共通の体験や経験の積み重ねによって生まれる、相手と共感する力と相手をリスペクトする姿勢を育てる必要があると私は考えます。

ゴリラやチンパンジーも共感力をもっています。彼らは食事や毛繕いなどをしてお互いの存在を確認し共感する力を高めます。「同じ釜の飯を食う」という言葉があるように、子どもも、共有の学習体験を通して泣いたり笑ったり、喜んだり怒ったりすることで共感力の基盤が養われていくと思います。

また、リスペクトは、よく「尊敬」と訳されますが、「尊敬」では尊敬される者と尊敬する者の間に上下関係が生まれてしまいます。学校という集団生活の中で、対等な人間関係を作る経験を重ねることができれば、互いを認め敬意を払う姿勢を醸成していくことができるのではないのでしょうか。

巷では、いたるところでAIが活躍していますが、AIはビッグデータを基にAかBかの二者択一の繰り返しで判断しています。AでもBでもない、二者を融合させたCを創り出すことは現在のAIにはできません。コンピューターにとって「0」と「1」の間は「無」なのです。でも、互いに共感とリスペクトが生まれれば、対立する二者から「C」を生み出すことも可能だと私は考えています。

逆に考えると、私たち教員が、まず「共感」と「リスペクト」をもって子どもに、保護者に、地域に直接向き合うことをしなければ、学校は社会から無用の長物の烙印を押されてしまうのではないかと、少し不安にもなってくる、学制発布151年目、2023年の春であります。

【特集テーマ】

地域とともに

二本松市立安達太良小学校 小野 明彦

本校では地域の恵まれた自然環境や社会環境を生かした「ふるさと学習」で、子どもたちに生きて働く力を育成しています。また、保護者、地域の人々と目標やビジョンを共有し、一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」を目指しています。

10月25日に地域のハロウィンカボチャペインティングに参加してきました。今年度は大きなカボチャが豊作のようで、たくさん飾られました。学年ごとに担当の場所に分かれ、光るセンスと感性でカボチャにペインティングをしていきます。「こんな風にしたい！あんな風になりたい！」というアイデアやイメージをひらめかせて筆を走らせることしばし。個性豊かなカボチャが次々にでき上がります。

このような地域との協働のイベントは、学校経営の基本方針に掲げる「地域とともにある笑顔輝く楽しい学校の創造」の実現には非常に良い機会です。活動を通し、郷土への愛着、誇りを育むことができますと考えます。さらに、イメージしたことや感じたことをのびのびと思い思いに表現できることから、想像力や創造力、そして豊かな感性や感覚が培われる絶好の機会となります。

地域について学び、地域から学ぶ学習では、学校と地域との結びつきが不可欠であり、それが学校への大きな応援となります。これからも協働するとともに、地域のよさを見出し、すてきな地域の皆様と出会いたいと考えています。地域のすべてが教室、地域で働く皆さんがみんな先生です。



【特集テーマ】

地域と共にある学校を目指して

二本松市立原瀬小学校 草野 節生

二本松市の西部、安達太良山の麓に位置する本校の学区は、緑豊かな地域で縄文時代の集落が発見された『上原遺跡』があります。ここには竪穴式住居が復元されており、遠い祖先がここに暮らしていたという証であり、地域のシンボルとなっています。

本校では、教育活動の柱として『キャリア教育』を推進しており、たくさんの人との出会いや豊かな体験活動を通して、人間関係や社会性を養うとともに、学ぶ意欲を高め、さらには将来の夢を持たせることを目指しています。

実際に、今年度もたくさんの地域の方に郷土を学ぶ学習や体験活動の講師として来校していただきました。コロナ禍ではありましたが、子どもたちは目を輝かせながら『本物を見て、触れて、感じて』と、教室だけでは学ぶことのできない貴重な活動を行うことができました。

さらに、本校では20年以上、地域とつながり守り続けてきたものがあります。それは、『原瀬太々神楽』です。これは、地域の諏訪神社において奉納されている踊りで、毎年、保存会の方から子どもたちが直接学ぶ活動を行っています。

練習は1ヶ月以上にも及び、11月の学習発表会において、その成果を保護者や地域の方に披露しています。地域の方との触れ合いや伝統文化の体験を通して、自分たちの住む地域を誇りに思い、将来大人になったときにその文化や歴史を語り継いでいってくれるものと期待しています。

実際に、指導に来る地域の方の中には、「自分が小学校の頃、この活動で神楽に触れたことがきっかけで、今は保存会に入り伝承する活動を行っている。」という方もおり、まさに長い伝統の成果が表れていると言えるでしょう。

これからも、地域と繋がることを大切に、地域と学校が協働して将来を担う子どもたちを育て地域社会の基盤をつくっていく、『地域とともにある学校』を目指していきたいと考えております。



【特集テーマ】

「走る東和 漕ぐ東和」に続くもの

二本松市立東和小学校 鈴木 浩記

「走る東和 漕ぐ東和」の伝統。学校では東和ロードレースを学校行事に位置づけ、大会に向けて練習に取り組むと同時に大会には全校生が参加する。また、4年生以上は学校のプールでカヌーを体験し、6年生は国体も開催された阿武隈漕艇場に出向き、公認コースでカヌーを体験する。

どちらも地域の力を借りながら、学校が地域と連携して行うもので、今後も受け継がれるであろう大切な行事のひとつである。



今年度、本校は隣接する東和中学校と合同で学校運営協議会が組織された。運営等を模索する中、2回目の会議で、ある委員から意見が出された。

「東和らしさって何でしょうね。」

確かに「走る東和 漕ぐ東和」を行事や体験活動として受け継いでいるが、「地域のよさ」について教職員がどこまで理解し、どこまで子ども達の学びにつなげられているのだろうか。ましてや「東和らしさ」に至っては・・・。

ふるさと（地域）の自然を愛し、ふるさと（地域）の伝統や文化を受け継ぐ子ども達を育てるために、コロナ対応が方向転換されつつある今が、

「走る東和 漕ぐ東和」に続く「東和らしさ」とは何かを、学校と保護者、地域が一体となり、本気で考えることができるチャンスと考える。

それぞれが立場を超えて、様々な意見を出し合い、実現に向けた最適解を導き出す努力を、粘り強く続けていきたい。

【特集テーマ】

楽しいことを考えよう！

本宮市立まゆみ小学校 鈴木 規男

本校は平成11年度に創立し、来年度創立25年目を迎えます。そして本校の教育目標は令和3年度から

「楽しいこと考えよう！」
 ～しあわせを創るまゆみっ子
 (ハピネスクリエーター)の育成～

となりました。「ハピネスクリエーター」とは、学んだことを生かして、

「より多くの人々の幸せを創り出す意思を持ち、誰かのために行動できる。」

「将来どのような時代においても自分の進むべき道を切り拓いていくことができる。」

ことです。

この写真は、6年生が第1学期始業式の日から毎朝続けている朝の清掃ボランティア活動の様子です。気づいたところを進んで清掃し、気温



の低いなかでも意欲的に活動する姿が見られます。また全校生による一斉清掃は、いつも無言清掃です。写真はトイレ掃除の様子ですが、低学年

の子どもたちも上級生に教えてもらいながら拭き掃除に取り組んでいます。まさに、全校生の笑顔（幸せ）のためにがんばる姿です。



今後も校歌にうたわれている

「ふくかぜうけて かがやくひとみ

こえたからかに えがおあふれる

きぼうあふれる みらいをひらく

本宮まゆみ小学校♪」

の姿から、ハピネスクリエーターの育成を目指します。

【特集テーマ】

【趣味・随想】

ふるさとは糠沢

本宮市立糠沢小学校 深谷 麻紀

本校の3年生は、総合的な学習の時間の中で、地域のことを学習していく。今年も、城内古戦場跡や夜泣き地蔵、糠塚古墳など、糠沢地区の歴史遺産の見学を行い、地域理解を深めてきた。

その中で、12月中旬に太々神楽を実際に見せていただく機会があった。高松神社太々神楽は、氏子により引き継がれてきた出雲流の神楽だそうである。本宮市指定無形文化財にも指定されており、地域の方々が大切に受け継ぎ、今に至るようである。



あとで聞いてみると、踊り手の二人は糠沢小の卒業生であり、本当の親子だったとのこと。演奏者には、本校児童も飛び入り参加させていただき、幅広い世代で伝統を守っている姿を見せていただいた。親から子へ、大人から子どもへ受け継ぐ姿は、まさに、伝統は継承されるものだと感じさせられた時間であった。

糠沢小学校の子どもたちにとって、ふるさとはこの糠沢地区である。自分のふるさとを愛し、この地を大切に受け継ぐ子どもを育てていくことは学校の大事な使命であると考えている。今後も地域と連携を図りながら、ふるさとを大切にすることを子どもたちを育てていきたい。

雄牛と鹿

二本松市立大平小学校 伊藤比呂美

本校の校長室には、彫刻の作品が2点あります。1点は「雄牛」、彫刻家橋本高昇氏の作品です。もう1点は、表示のない「つがいの鹿」です。これも、牛や鹿の彫刻を得意とした橋本高昇氏の作品と思われませんが、正確には作者不明です。

彫刻家橋本高昇氏（本名留治）は、明治28年に二本松市（大平村）の農業、橋本磯右衛門の三男として生まれ、高等小学校卒業後上京して修業。大正14年帝展に初入選し、その後も受賞を重ね、日展会員、日展評議員を経て、日展参与となりました。校長室にある「雄牛」は、昭和7年第13回帝展の特選受賞作品であり、同年本校に寄贈されたものです。二本松城少年隊の丘にある二本松少年隊のレリーフ「二本松少年隊奮戦の図」も、橋本高昇氏の作品です。今では、箕輪門前にある少年隊の像（平成8年設置）が有名ですが、その作者橋本堅太郎氏は、父親が制作したレリーフを意識したであろうと想像します。

「雄牛」は、本校に寄贈されて約90年が経ちます。昭和47年度在職職員から贈られたガラスケースに守られ、子どもたちと同様、地域の宝として大切にされてきました。これからも何かに挑もうとする力強い姿勢を示しながら、子どもたちの成長を見守ってくれることと思います。



<参考文献>

- ・東京文化財研究所アーカイブデータベース
- ・二本松市教育委員会 I T 美術館データベース

【趣味・随想】

自分を見つめる時間「登山」

二本松市立油井小学校 児山 秀典

管理職になった年から始めた登山。私が山登りに興味を持ったきっかけは、様々な課題解決や困難（と自分は思っているが、そう大したことではなかったりする）によって、自分を見失いそうになる瞬間から自分を救うためだった気がします。こんな私でも、山頂に至れば必ず達成感が保証される登山。事がうまく進まず、くじけそうになる気持ちに、「やればできるじゃないか」「たゆまず足を運ばばきっと目標に、目的にたどり着くんだ、まだまだやれるぞ」と、山頂制覇が自分の弱い心を叱咤激励してくれる気がしたのです。登山は、私にとっての効果抜群の栄養ドリンクでした。妙義山、谷川岳、男体山、日光白根山、燧ヶ岳、木曾駒ヶ岳、乗鞍岳等、遂に 3000m 級の山への挑戦も始めたところです。いつかは「富士山・剣岳・槍ヶ岳・燕山・白馬岳制覇」を目指し、しばらくの間は近くの山で体力を温存、来たるべき時（60歳過ぎ・・・かな）を静かに待ちたいと思います。ニッコウキスゲやワタスゲ、チングルマ、オノエランなどの植物に癒やされ、時に季節によって体の色を変える鳥ライチョウに出会うなど、自然を味わう楽しさは想像していた以上でした。最近では、早起きして、湯川溪谷登山道付近を歩いて散歩しています。安達太良登山をするなら、ぜひこの湯川ルートがお勧めです。登山と同じぐらいの達成感を日々の仕事でも味わうことができるよう、これからも精進していきます。



【趣味・随想】

素敵な解答

本宮市立本宮小学校 穂山 俊之

今年の4月。3年生の教室を訪問した時のことです。Aくんの机にある漢字プリントが目にとまり、思わず写真にパチリ。（左写真）



漢字テストの解答としては、「話した」が正解なのでしょう。でも・・・「友だちにお花をあげた」という解答。素敵だなあ。そして、そう書いた子どもの解答に「◎」（ただの○ではなく、◎!）と評価した担任の先生も素敵だなあ。

きっと普段の生活経験から、導き出された解答なのでしょう。そこにAくんの「優しさ」（または、なんとか答えをひねり出そうとする「賢さ」「たくましさ」かな?）と担任の先生のおおらかさ、そして、両者の素敵な関係性が見て取れます。

学校生活をしていく上では、むしろこちらのほうが「正解」かもしれません。

教師と子どもとの「望ましい人間関係」が授業の基盤・・・なんて、よく言われます。

そう考えたときに、上のような解答をどう評価し、その子に返していくか・・・そんな視点をもつことも大切だと思っています。

「話した」という解答だけしか認めないというのではなく、「花をあげた」としたAくんの解答も、しっかり認め、価値づけてあげたいものです。

【趣味・随想】

「校務支援ソフト導入にあたって」
～遅延化回避のために～

本宮市立五百川小学校 佐藤 聡

本市の小学校は、R5年度から校務支援ソフトが導入されます。近隣の市町村では既に導入済みですが、操作性に課題があり、校務の遅延化を避けるために、限定利用にとどまっている話を耳したことがあります。

本校では、3つの自作ソフト（時間割&週案ソフト、出席簿ソフト（担当用ツールあり）、教育カレンダー時数計算ソフト）を利用中です。3つのソフトの主な仕様の共通点は、エクセルファイル、VBA（Visual Basic for Applications）で動作、カレンダー更新機能、全シート関数ゼロです。デリートキーで関数が消えてしまったり、計算できなくなったりということは皆無です。故意に、行列を削除したり挿入したりしない限り、正確に動作するソフトです。とは言っても、素人の作り物の域は越えていない代物ですが・・・。

12月中旬未明。就寝中にふとアイデアがひらめきました。急いで、スマホの照明を点け、付近にあった白紙にプログラミングの構造をメモしました。長年の夢実現の瞬間でした。時間割&週案ソフトでは、特別支援学級担任用のものが、ようやく完成する目処が立ちました。具体的には、交流学級との時間割調整機能に加え、複数学年一括週案及び時数管理機能も加えることができました。

VBAを学び始め、あっという間の27年。「手指が脳を育てる」ことは自明ですが、これからも「Imagination and creation」を駆使し、人々の生活に役に立つものを創出していきたいと思いません。

【趣味・随想】

好きだから上達する

本宮市立和田小学校 佐藤 憲博

老舗のテニスクラブに入会し、土曜の練習を続けて25年。大学から始めた硬式テニスは、40年以上になる。テニスの奥深さに触れ、相手をリスペクトしながらプレーする週末は、貴重な時間である。

この数年、県北のダブルス大会に年に数回参加して、負けを重ねながらも、試合の駆け引きや技術面が上達してきた。相手の攻撃を受け身ばかりで対応しているのは、勝負の流れが相手にいつまでも。前衛にいる時、ストレートを抜かれるリスクを取って、ポーチに飛び出すタイミングはどこなのか？このポイントでレシーバーは、安全にクロスに返そうとするだろう。よし勇気をもって出る！ペアと相談したり、声をかけ合ったりしながら強気で攻めることが大切だ。うまくいくときも、決定的チャンスでミスすることもある。慌てない対応とは、難しいものだと思ってしまう。試合で勝負するのは、まさしく「ちむどんどん」といったところである。

一緒に練習する仲間は、30代から80代までの10人ほど。前任校で誘った技能主査さんも「おもしろいです」と喜んで続けてくれている。一生懸命取り組んでいる人を見ると「ボールをよく見るといのは当たる瞬間に声を出すことだよ。」と教えたり、YouTubeの技術動画の基本的なポイントを伝えたりしながら、相手の上達と一緒に喜んでいる。また、冬は体力作りのため、雪かきも積極的にしている。社会貢献にもなり、暖房機を使わない時間は節電にもなる。

テニスに真摯に取り組み続けて、心技体のバランスの大切さを実感したり、テニス以外の先輩の考え方に学んだりすることができた。精神的に成長できたことを感謝している。今後も練習している仲間や大会に参加している85歳のレジェンド、若手にも学びながら腕を磨いていきたい。